早稲田大学 2023年度
一般選抜 教育学部

総合問題（複）

（問　題）

2023年度

〈2023　R05170015（総合問題（複））〉

注　意　事　項

1. 試験開始の指示があるまで，問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は２～５ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は，手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて，ＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシルで記入すること。
4. 記述解答用紙記入上の注意
   (1) 記述解答用紙の所定欄（２カ所）に，氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
   (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
   (3) 受験番号の記入にあたっては，次の数字見本にしたがい，読みやすいように，正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

   (4) 受験番号は右詰めで記入し，余白が生じる場合でも受験番号の前に「０」を記入しないこと。

（例）　3825番⇒

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 試験終了の指示が出たら，すぐに解答をやめ，筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
7. いかなる場合でも，解答用紙は必ず提出すること。
8. 試験終了後，問題冊子は持ち帰ること。

以下の２つの資料は、外国語・文学・翻訳に関わる内容である。資料を読んで以下の問いに答えなさい。

問題１　【資料１】の内容を300字以上400字以内で要約しなさい。

問題２　【資料１】【資料２】の類似点をそれぞれの文章から引用することで指摘しつつ、「自動翻訳」の精度がますます高まりつつある昨今の状況を踏まえ、外国語・文学・翻訳についてのあなた自身の考えを1,000字以上1,200字以内で述べなさい。

【資料１】

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

（管啓次郎『コヨーテ読書――翻訳・放浪・批評』青土社、2003年）

出題者注

＊1　この文章が書かれたのは1997年のことである。

＊2　日本大使公邸占拠事件当時、ペルーの大統領は日系人のアルベルト・フジモリだった。

＊3　＊1を参照のこと。

【資料２】

ペテルブルグで通うことになる学校に初めて着いたとき、目の前に現れたバロック様式のお城のような建物が「学校」だとは、ちょっと信じられなかった。

その語学学校は、ペテルブルグの左端にあるスモーリヌイの建物群のなかにあった。中央にあるスモーリヌイ大聖堂をぐるりと校舎が取り囲む造りのこの学校は、もとはエカテリーナ２世の時代にスモーリヌイ女学院として貴族の子女の教育のために創立された学校であり、帝政時代の女子教育の先駆け的な存在だった。そしてロシア革命期の1917年にはここでソヴィエト政権の独立宣言がなされ、首都がモスクワに移されるまでのあいだは革命本部が置かれていた。さらにソ連時代、第二次大戦期には地下が掩体壕（えんたいごう）として利用され、戦後には建物の修復作業がなされて、ペテルブルグの歴史資料展などがおこなわれていたという。

そんな歴史ある建物の一角を借りて授業がおこなわれていた語学学校は、主にヨーロッパからの留学生の多い自由な雰囲気の学校だった。ソ連崩壊から10年と少ししか経っていなかった当時、先生たちは留学生の反応をみながらこぞって新しい教育方法を模索し、新しい教科書や問題集の作成に熱心で、その意欲がこちらにもガンガン伝わってきた。

クラス分けのテストを受けて入ったクラスにいたのは、ドイツから来たジルケという女の子と、フランスから来たジャン＝フランソワという男の子、イタリア人の男の子二人組、ドイツで育ったロシア系移民の女の子、トルコ人のおじさんといった多彩なメンバーで、会話の授業では先生が楽しそうに「ロシア人はあまり笑わないって言われるけど、実際に来てみてどう？　あなたたちの故郷では街角でもみんな笑っているの？」といった話題をふっては盛りあがっていた。

会話のほかにも、筆記、文法、映画鑑賞、小話を読む、ロックの歌詞を読む、といった授業があり、それぞれ個性的な先生が教えていたが、私がいちばん好きだったのはエレーナ先生が教える文学精読の授業だった。

茶色い髪を後ろでちいさなおだんごに結いた小柄なエレーナ先生は、40歳くらいだろうか。いつもなにかに困惑したような難しい顔つきをしているけれど、話をするとその「難しい」顔がじっくりとこちらの話に聞き入ってくれるのがわかり、いつまでも話していたくなるような雰囲気がある。服装はいたって素朴で、毎日同じ紺のフリースジャケットを着ていた。日本でも1990年代後半に大ヒットしたフリースは、安価で防寒に役立つのでロシアでも幅広い層に人気を集めていたが、あまり質がいいとはいえないものも多く、連続して着ればすぐに毛羽立った。エレーナ先生の着古してぼろぼろになったジャケットはお世辞にもお洒落とか格好いいとかいう類のものではなく、むしろこの先生はそんなに生活に困窮しているのだろうかとさえ思わせた。

しかしそんなことはすぐにどうでもよくなった。エレーナ先生の服はもちろん、自分の着るものもどうでもよくなった。そのくらい、授業が楽しすぎたのだ。それまで主に散文しか読んでいなかった私は、この先生から初めてロシア語で詩を読む喜びを教わった。エレーナ先生はツヴェターエワ、アフマートワ、ブロークといったいわゆる銀の時代*1の王道の詩をすらすらといくらでも暗唱する。その朗読があまりにすばらしいので、詩の意味などほとんどわからなくても「あんなふうに読みたい！」と憧れて、寮に帰ってからも配られたプリントに並ぶ言葉をひたすらぶつぶつと繰り返した。

［中略］

すっかりエレーナ先生の授業に夢中になっていたころ、ある幸運が舞い込んだ。学校が、手違いで私が払った学費に対し授業のコマ数が少なくなっていたから、そのぶん追加で好きな先生の個人授業を受けさせてくれるというのである（いま思えばこれはかなり良心的な対応だ。ロシアの大きな大学が資金の工面のために留学生を受け入れているような場合、在学中に予告なく授業料や寮費が数倍に値上がりした、などという話はざらに聞く）。

私は迷わずエレーナ先生を頼んだ。そうしていつもの授業のほかに、先生と一対一で好きな作品を読み、話をする機会を得てしまった。幸せだった。

ペテルブルグに来て二度目の冬が近づいていた。あたりまえのことだが、夏が白夜なら冬は暗い。朝８時のバスで学校へ向かうときはまだ夜中のように暗く、学校の食堂の昼食をとるころにわずかに空が白むが、午後の授業を受けているうちにまたあっという間に暗くなってしまう。だから通常の授業が終わったあとのエレーナ先生の個人授業はいつも薄暗かった――当時のペテルブルグでよく用いられていた照明は日本でいえばバスルームにあるような電球で、点けても部屋の中央を心もとなく照らすだけで、明るいとは言い難い。

グループの授業がひととおり終わったあと、私は薄暗い廊下をずっと進んだ先のつきあたりにあるちいさな部屋へ向かう。その部屋で私は先生と一緒に、ロシア語をはじめたきっかけでもあるレフ・トルストイを読み、新たに好きになったブロークを読んだ。トルストイなら『クロイツェル・ソナタ』*2を読みたいと言うと、エレーナ先生は「個人的にもすごく大事な作品」だからぜひ読もうと言った。あまりに目をぎらぎらと光らせて身を乗りだすので、不意

に怖くなったほどだった。授業を進めながら、先生はその理由を話してくれた。『クロイツェル・ソナタ』は、主人公ポズドヌィシェフが妻の浮気を疑い、発見し、嫉妬にかられて刺し殺す話である。先生は過去に、結婚相手に暴力をふるわれ離婚していた。その経緯には相手の「嫉妬」という感情が大きく作用していたという。だからこの作品に関心を持つ理由は過去のつらい話に直結していたのだが、先生は驚くほど率直に、自分の感じたこと、後悔していること、いまでも考えていることなどを打ち明けて、私に「一緒に考えよう」と語りかける。この時期、私はそれまで知らなかった単語をたくさん知り、それを実際に使うことにドキドキしていた。しかも、そのドキドキと一緒に覚えた言葉は決して忘れないのだ。語学学習というと、一般的には表面的な会話や社交辞令のような言葉から入ることが多い。むろんその便宜性、妥当性は充分にあるにしても、しかし私たちの心の底にあるのはもっと根源的な、どろどろとした得体の知れないものだ。そのどろどろを掬(すく)って言葉にしていくことは、その言語で思考できるようになるための第一歩なのかもしれない。

そんなふうに授業を受けていたある日、エレーナ先生がふと「あっ、鳥が……」と窓の外を指した。顔をあげると確かに、雪で覆われた窓のすぐ外にある木の枝に一羽の鳥がとまっていた。先生は、「あなたは絶対にこの瞬間を忘れないわ」と続けた。「一緒に『クロイツェル・ソナタ』を読みながら、恋愛や社会制度や嫉妬や、そのほかありとあらゆる話をしたことも、窓の外には雪が降って、鳥がとまっていたことも。あの鳥を、あなたは絶対に忘れないわ」と。そう言われて、私は「ああ、ほんとうにそうなんだ」と思った。この瞬間を、あの鳥を、私は生涯忘れないだろうと。

それは言葉の魔法だった。文学に精通していたエレーナ先生は、どういうときにどういう言葉を使えばそこに魔力が宿るのかについても、知り尽くしていた――まさにあの瞬間に（ほかのときではだめなのだ）、私にそうして魔法をかけることで、あの空間やあの鳥が、特別なものになることを。

（奈倉有里『夕暮れに夜明けの歌を――文学を探しにロシアに行く』イースト・プレス、2021年）

原注

＊1　19世紀末から20世紀初頭にかけて数多くの詩人が輩出された時代で、象徴主義、未来派、印象派などさまざまな流派が生まれた。［以下略］

＊2　1887～89年執筆。［以下略］

〔以　下　余　白〕

〈2023 R05170015（総合問題（複））〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

採点欄	［1］		［2］	
	＋	－	＋	－

〈2023 R05170015（総合問題（複））〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

総合問題（複）

（解答用紙）

注　　意

1. 受験番号（算用数字）・氏名は指示に従ってただちに所定欄に記入し，それ以外に記入してはならない。
2. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
3. 解答はＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシルで書くこと。
4. 試験終了時にはこの解答用紙を裏返して机の上に置き，指示を待つこと。

問題 1

300字

400字

＋	－

問題 2

1000字

1200字

＋	－